

大和市 対話による 美術鑑賞事業

大和市「対話による美術鑑賞」事業の主旨

市と市教育委員会では、子どもたちの感性を高め、豊かな情操を養うとともに、観察力や思考力、コミュニケーション力などの育成を目的に、平成24年度より「対話による美術鑑賞」を導入しています。認定NPO法人芸術資源開発機構（ARDA）の研修を受けたボランティアチーム「やまとアートシャベル」が中心になって実施しています。

大和市「対話による美術鑑賞」事業は、3つのことを目的としています。

1. 観察力

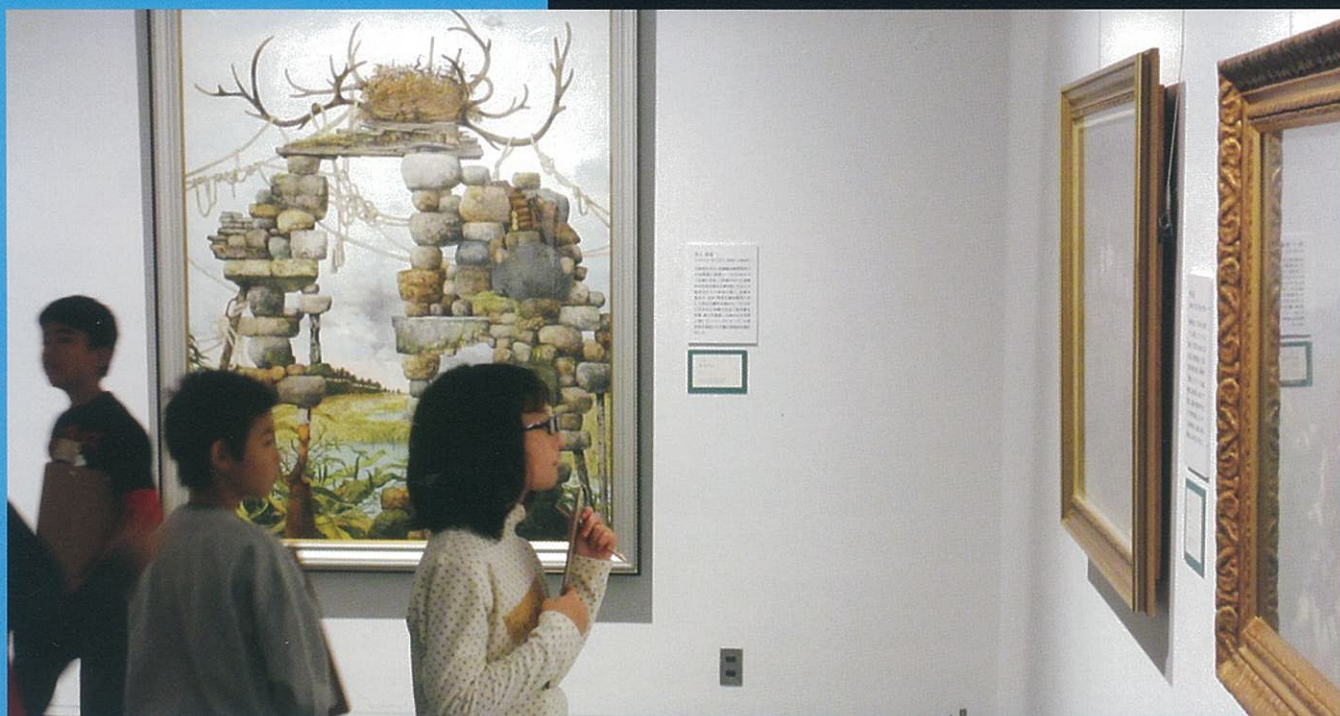
よくみることの
楽しさ大切さを
学ぶ

2. 思考力

答えのないことを
考え続け言葉に
しようとする

3. コミュニケーション力

人の話を
よく聴いて
話せるようになる



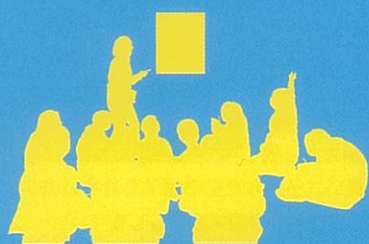
「対話による 美術鑑賞」 とは？

グループで美術作品をみて、対話しながら作品の見方を深めていく鑑賞方法のことをいいます。一人ひとりが感じたことや考

えたことを自由に発言し、互いの話をきくことで新たな発見が生まれます。知識に頼らず、よくみて自分の考えを言葉にするなかで、子どもたちは主体的にものをとらえ、答えのない問題を考え続ける面白さを学んでいきます。

大和市では、1980年代からニューヨーク近代美術館（MoMA）で研究開発されたVTS（= Visual Thinking Strategies ビジュアル・シンキング・ストラテジーズ）という方法をベースに、日本の子どもと学校環境により適応させた鑑賞授業を行います。

※ VTSの詳細は裏面をご覧ください。



主催：大和市・大和市教育委員会

企画運営：認定NPO法人芸術資源開発機構（ARDA）

2つの授業タイプ

◎ 教室授業型

学校内で1クラスにつき2時限(45分×2コマ)の授業を行います。
1日で2クラスまで実施が可能です。

教室授業



◎ 教室授業 + 美術館訪問授業型

教室授業を行った約1週間後に美術館を訪問します。
※教室授業型との相違点は赤字で記しています。

教室授業



+

美術館

訪問授業



◎ 2つの授業タイプ共通項

▼ 事前打ち合わせ (授業の約1週間前に約1時間 ※約2時間)



コーディネーターが学校にお伺いし、事前準備から授業の流れや先生の役割についてご説明し、使用教室と機材の確認をします。全クラスの担任の先生にご出席をお願いします。先生からの希望や質問なども率直にご相談ください。
※美術館訪問の下見は事前にお済ませください。

▼ 事後：アンケートと写真使用の協力

授業終了後に先生にアンケート(やまとアートシャベルと文化振興課の2種)のご協力をお願いします。クラス担任の先生それぞれがご記入のうえ、ご返送ください。

また、授業では報告書の掲載や広報使用を目的とした写真撮影を行います。使用する写真について「写真使用許可のお願い」申請書をお送りし、許可をいただいた写真のみ使用します。

教室授業



▼ 1時限目 アートカードを使った鑑賞

▼ あいさつ (約10分)

全員で教室からスタートします。やまとアートシャベル(=シャペラー)の自己紹介と、授業内容の説明をします。



▼ アートカード (約25分)

2つの教室に分かれて活動します。5~6人のグループで、葉書サイズのアートカードを使ってゲーム感覚の鑑賞をします。

① 神経衰弱ゲーム

作品をよくみて、自分なりの視点をみつける。

② 物語づくりゲーム

作品の特徴をとらえ、自由な発想で編集して伝える。

▼ ミニ VTS (約10分)

A4サイズの作品シートをみながら、グループで対話しながら鑑賞します。少人数での対話に慣れ、2時限目の多人数での対話へ繋がります。

※ 好きな作品を探そう!

美術館の作品カードの中から訪問時にみたい作品をそれぞれが選び、その理由を発表します。



▼ 2時限目 電子黒板を使った鑑賞

▼ 対話による鑑賞(VTS) 2作品×15分 (約30分)

それぞれの教室で作品を大きく映し、クラスの半分の人数で鑑賞します。友だちの意見もよく聞いて、自分なりの考えを発言することにチャレンジします。



▼ 鑑賞シート (約10分)

教室に戻り、全員そろって「鑑賞シート」に記述します。発言だけでは拾えない子どもたちの言葉をすくい取るためのツールです。時間が足りない場合は授業後に時間をとるなどの対応をお願いします。



▼ 結び (約5分)

子どもたちから感想を聞き、振り返ります。最後にフォローアップ教材として配布する「親子で鑑賞ワークシート」の説明をします。

※ 訪問する美術館とマナーについてお話し、美術館への期待を高めます。



▼ 終了後

▼ 振り返り (約30分)

お昼休みに先生も参加していただき、授業の振り返りを行います。シャペラーからは担当グループの様子をお伝えし、先生からは日常との違いなどを伺い、子どもたちの様子を共有します。お伝えしきれなかった分は活動の様子を書面でお渡します。



美術館 訪問授業



美術館訪問

<美術館の4つのマナー>

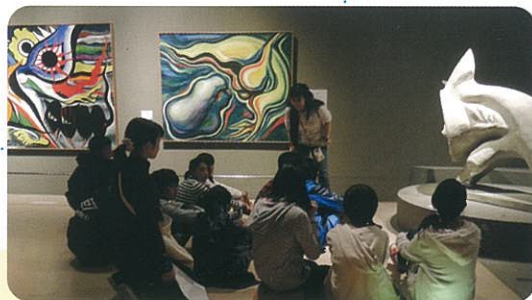
- ゆっくり歩こう
- 絵や壁から30cm以上はなれよう
- 小さな声でお話しよう
- クリップボードは両手で身体の前に持とう

美術館の訪問前に再度子どもたちに当日の活動と美術館のマナーを守るよう伝えてください。以下は基本的な美術館プログラムの進行例です。(約90分)

▼ あいさつ・クールダウン

(約20分)

ようこそ美術館へ！荷物を置いて気持ち切り替え、落ち着かせます。マナーの確認や活動についての説明をした後、展示室へ移動します。



▼ グループ鑑賞① 空間把握 (約10分)

グループで移動しながら観覧し、展示室全体の様子を把握します。

▼ グループ鑑賞② 対話による美術鑑賞 (約30分)

本物の作品の前で、対話しながら鑑賞します。1作品につき15分程度、2作品を鑑賞します。

▼ 個人鑑賞 (約20分)

学校で選んだ作品や、気になる作品とじっくり一人で向き合います。自立的に作品と向き合い、自分なりの視点で作品鑑賞を楽しめるようになることを目指します。ワークシート使用。



▼ 結び (約10分)

最初集まった部屋にもどり、子どもたちから感想を聞きながら、全員で振り返りをします。



<先生の役割とお願い>

あいさつ

授業開始と終了時

司会シャベラーの紹介

授業の開始時冒頭

みとり

2つの教室を行き来しながら、子どもの言葉や様子をじっくり観察してください。一生懸命な様子、考えたこと、言葉にしようとしたこと、友達の意見をよくきいたことなどを評価にいかしてください。名簿メモの用意や対話の展開の書き取りもおすすめています。



シャベラーへのお手紙

一緒に過ごしたシャベラーさんへのお手紙を書くことは、子どもたちが学んだことを言葉にする機会となっています。

また、シャベラーはボランティアで活動して、子どもたちに少しでも豊かな体験と学びの場を提供できるよう、日々研鑽を積んでいます。子どもたちからのお手紙は、活動の大きな励みと気づきの源にもなります。



子どもたちの声

*お手紙から

「私はアートは『絵をかく』ということだけだと思っていました。でも絵を見たり、絵を見て考えることもアートなんだなと思いました。」(5年生)

「絵というものは、見かたや見る自分の気持ちをかえるだけで気持ちや、その絵でおきていることがかわったりするから絵は面白く、楽しいことが一番心にのこりました。」(4年生)

「絵には伝えたいものがあり、見方はそれぞれにあり、楽しみ方もさまざまだとわかりました。だから絵はおもしろくて、見ていてとても楽しいです。」(6年生)

「なかなか思いつかず2回しか発表しなかったけど、心のなかではいっぱい思っていました。ぼくは絵をかくのは苦手だけど、みるのは好きになりました。」(4年生)

「絵を見比べたり、絵をみて、似ているところ、同じところを探すと楽しさを知りました。…私はみんなが言った意見をきいて『自分では思いつかないようなことを言っている』と思い、友だちの意見をきくのも大切だなと思いました。私はこれまで美術館行ったことがあまりなかったけれど、今日美術館に行ってみて、大人になった気分になれた気がします。」(5年生・美術館訪問)

先生たちの声

「少人数の活動で男子も女子も頭を寄せ合い、話し合いをしていた姿は担任としてうれしかった。」(6年担任)

「子どもたち自身がとても楽しんだ2時間だった。家族にも話したという感想を口にしていることから、子どもたちの心がゆさぶられた魅力のある取り組み、活動であると感じた。」(4年担任)

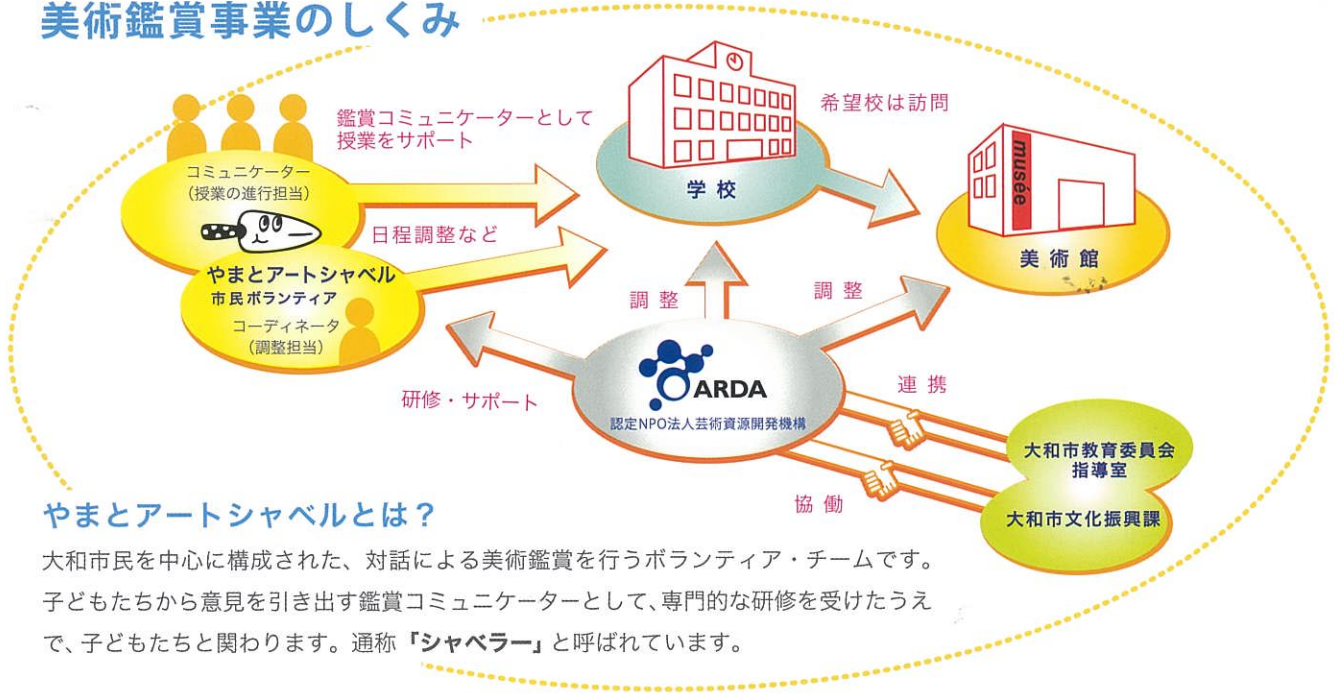
「友だちと意見を交流し、自分の見方と相手の見方の違いに気付いたり、価値観を広げたりすることが出来る授業だと感じました。」(5年担任)

「日常では見られない児童の姿をみることができ、私たち教師にとっても有意義な時間を過ごす事ができました。この活動を通して、<伝え合うこと>が子どもたちにとって楽しさを感じる活動になったことが授業後に感じ取れました。」(4年担任)

「ふだんあまり発言しない子が発言するきっかけが見られた。自分の感じたことを用紙に書いている子、書いていないが伝える子など、それぞれの表現の仕方の特徴を改めて知ることができた。」(5年担任)



大和市対話による 美術鑑賞事業のしくみ



やまとアートシャベルとは？

大和市民を中心に構成された、対話による美術鑑賞を行うボランティア・チームです。子どもたちから意見を引き出す鑑賞コミュニケーターとして、専門的な研修を受けたうえで、子どもたちと関わります。通称「シャペラー」と呼ばれています。

ビジュアル・シンキング・ストラテジーズ Visual Thinking Strategies (=VTS) について

VTSはひとつの正解を追求するのではなく、よくみて、自分の考えを言葉にすることを重視しているため、子どもたちの観察力、思考力、コミュニケーション力、そして答えのない問題を考え続ける複合的な力が身につくとされています。

MoMAの元教育部長、フィリップ・ヤノウィンと、認知心理学者であるアビゲイル・ハウゼンとの長年の実践と調査研究をとおり、学校教育現場を意識した手法としてVTSを開発しました。

3つの質問で対話が進みます。

- この絵の中で何が起きている？

オープンに解釈させる質問で、自由に発想を広げて考えることを促します。

- どこからそう思ったの？

絵から受ける印象や独自の解釈について、根拠を探します。絵の中に根拠を見つけようとする中で、感覚的だったものがだんだん具体的になっていきます。

- 他に気づいたことはありますか？

出てきた意見に付け加える意見や反対する意見、またはこれまででてこなかった発言を促します。

授業の中で子どもたちは作品をじっくりみて、クラスメイトの前で考えたことや感じたことを自由に話していきます。鑑賞コミュニケーターはそれまでに出た発言とリンクさせ、鑑賞のポイントを意識しながら、子どもの発言を言い換えます。その都度言い換えることで、子どもたちが考えたすべての意見を受け止め、大切なひとつの考えとして扱うことができます。自分の感じていることや考えていることを丸ごと受け止めてもらえることで、子どもの中に自己肯定感が育ちます。周囲の子どもは、頭の中で絵について考えをまとめたり、新たな考えを思い浮かべたりすることができます。鑑賞コミュニケーターは子どもの発言をまとめたり、結論づけることはしません。大人がまとめると、子どもたちは取り上げられた意見が重要で、取り上げられなかった意見は重要でなかったように感じてしまうことがあるからです。子どもたちの中に、自分たちだけでここまでみることができたという満足感と、もっと作品をみたいという気持ちを残して対話は終わります。

